双海町誌　目次

双海町地図・写真
序　文……双海町長　仲野　和

第一篇　町の概観

第一章　立地と人口……一
第一節　町の位置と面積……一
第二節　地勢……一
第三節　人口……二
第四節　気質……九
第二章　気象……九
第一節　気象の概要……九
第二節　異常気象と災害……一五
第三章　地質……二七
第一節　日本の地質概要……二七
第二節　伊予郡市の地質概要……三一
第三節　双海町の地質概要……三五

第四章　生　物……四二
第一節　植　物……四二
第二節　動　物……四三

第二篇　沿　革

第一章　原始より中世……四六
第一節　原始時代……四六
第二節　古　代……四七
第三節　上　代……四九
第四節　中　世（郷土の諸城・落人）……五五
第二章　近　世……八一
第一節　概　要……八一
第二節　関ケ原の合戦と郷土……八二
第三節　伊予八藩について……八三
第四節　大洲藩の成立……八三
第五節　幕府の大名対策……八四
第六節　検地と村高……八七
第七節　領民の生活……八九
第八節　郷土の様子……九一
第九節　幕府巡見使と大名……九四
第一〇節　藩行政と郷土……九五
第一一節　藩米高と納入方法……九八
第一二節　郷土の自治組織……九九
第一三節　藩札について……一〇〇
第一四節　厳しい生活制限……一〇一
第一五節　幕末の動向……一〇二
第一六節　大洲騒動……一〇三
第三章　近　代……一〇五
第一節　概　要……一〇五
第二節　明治時代……一〇七
第三節　大正・昭和前期（大戦下の郷土）……一二〇
第四節　兵事（戦没者）……一二九
第五節　議決機関（議員）……一五二
第六節　執行機関（町村長外）……一六二
第四章　現　代……一六七
第一節　概　要……一六七

第二節　戦後の郷土……一七〇
第三節　双海町の誕生……一七二
第四節　選　挙……一八六
第五節　執行機関（町長外）……一八八
第六節　地方財政……二〇四
第七節　郷土の将来……二一四

第三篇　産業・経済

第一章　産業人口……二一六
第一節　安土桃山時代前……二一六
第二節　藩政時代……二一六
第三節　近　代……二一七
第四節　現　代……二一八
第二章　農　政……二二一
第一節　概　説……二二一
第二節　終戦前後の農政……二二四
第三節　新しい農政（農業委員）……二三二
第三章　農　業……二三七
第一節　概　要……二三七
第二節　農業技術の発達と機械化……二三九
第三節　養　蚕……二四七
第四節　畜　産……二四九
第五節　普通作物……二五一
第六節　果樹園芸（園芸協同組合）……二五五
第七節　特用作物……二六四
第八節　農業協同組合……二六六
第四章　林　業……二七五
第一節　概　要……二七五
第二節　建　築　材……二七六
第三節　薪炭（森林組合）……二七七
第五章　漁　業……二八一
第一節　漁場の開拓……二八一
第二節　明治前期の漁業……二八四
第三節　漁業の近代化……二八七
第四節　現代の漁業……二九七
第五節　漁業の将来……三〇五

第六節　漁港……三〇八
第七節　組合……三一二
第六章　商工業……三一七
第一節　工業……三一七
第二節　商業（商工会・その他）……三二一
第三節　金融（伊予銀行）……三二六

第四篇　社会

第一章　教育……三二八
第一節　概説……三二八
第二節　江戸時代の教育……三三一
第三節　小学校教育（各小学校）……三三五
第四節　中学校教育（各中学校）……三六二
第五節　青年教育（青年団）……三七七
第六節　幼児教育（幼稚園）……三九二
第七節　高等女学院……三九六
第八節　社会教育（公民館・婦人会）……三九九
第九節　教育行政……四二九
双海剣道会……四三七
第二章　交通運輸と通信報道……四四〇
第一節　近世の交通……四四三
第二節　近代の交通……四四四
第三節　通信報道（郵便局）……四五五
第三章　治安と消防……四六四
第一節　治安……四六四
第二節　消防（消防団）……四六七
第四章　厚生……四七一
第一節　民生事業制度の沿革……四七一
第二節　生活保護……四七三
第三節　世帯更生資金の貸付……四八二
第四節　愛の基金貸付制度……四八四
第五節　民生委員……四八五
第六節　たすけあい運動……四八九
第七節　国民年金……四九一
第八節　衛生……四九五

第九節　水道……五〇一
第一〇節　疾病……五〇五
第一一節　保育所……五〇九
第一二節　団体……五一〇
第五章　宗教……五一七
第一節　神道（神社・教会）……五一七
第二節　仏教（寺院）……五三二
第六章　民俗……五四五
第一節　概説……五四五
第二節　生産暦……五四七
第三節　仕事と道具……五四九
第四節　衣服・仕事着……五五三
第五節　繊維と織物及び染料……五五六
第六節　毎日の食事……五五七
第七節　赤飯・餅・だんご……五六〇
第八節　家の建て方……五六二
第九節　社会生活……五六七
第一〇節　物資の運搬交易……五七〇
第一一節　一生の儀礼……五七四
第一二節　別火・墓制……五八一
第一三節　年中行事……五八二
第一四節　信仰の旅と道祖神……五九三
第一五節　民俗・信仰……五九四
第一六節　郷土芸能とスポーツ娯楽……六〇〇
第一七節　昔話と伝説……六三二
第七章　名所・旧蹟……六四二

第五篇　人物小伝

千代次（六四六）　門田九郎左衛門（六四六）　玉井琢磨（六四七）
好五郎（六四八）　おきよ（六四八）　魚見ツネ（六四九）
大塚長助（六五〇）　井上新吉（六五〇）　都築覚兵衛（六五一）
帯屋与衛門（六五一）　槙鹿蔵（六五二）　赤尾政太郎（六五三）
井上右市（六五三）　東熊吉（六五四）　都築三喜太郎（六五四）
栗田愛十郎（六五五）　本田重次郎（六五六）　奥島貫一郎（六五六）

井上熊太郎（六五七）　栗坂一真（六五八）　米岡伊太郎（六五八）
上岡義計（六五九）
参考写真集……六六〇
双海町年表……六六八
町誌編纂……六七七

第一篇　町の概観

第一章　立地と人口

第一節　町の位置と面積

松山市から国鉄予讃線で、伊予市を経て約三〇分南下（二二・一粁）すると、右手に波静かな瀬戸内海、左手に山並みの迫った町が双海町である。

東経一三二度三八分、北緯三三度四一分を中心に海岸線約十六粁の長方形をした双海町は、北は瀬戸内海の伊予灘に面し、北東は伊予市、南は山嶽を経て中山町、内子町、大洲市に、西は長浜町と接する。

教育、経済ともに松山圏内にあり、行政も松山市を中心にした中央都市圏構想内に予定されている。

衆議員の選挙は第一区で中予に属するが、旧藩時代は大洲藩領であり、言語、風俗、習慣等に大洲の匂いが残存する面積六三・一九平方粁の町である。

区分＼地目	田	畑	山林	原野	宅地	その他	計
面積 km²	二六五・六	六七八・二	四六七三・〇	〇	四七・六	六五五・七	六三一九・〇
構成比％	四・二	一〇・六	七四	〇	〇・八	一〇・四	一〇〇

第二節　地勢

四国山地の一山系である明神山（六三四米）が北に、南は牛の峰（八九六米）黒山（七三〇米）が連なり、西に壷神山（九七一米）が聳える。これ等の中間に三秋峠～（伊予市へ）、犬寄峠～（中山町へ）、鳥越峠～（内子町へ）、朝が峠～（大洲市へ）があり、海岸路線が通じる長浜町以外へは、主としてこれ等の峠を経て隣接市町村